

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12148

研究課題名(和文) 思春期慢性疾患患者の復学支援アセスメントツールの開発

研究課題名(英文) Development of an assessment tool for school-reentry support for adolescent chronic illness

研究代表者

本多 直子 (HONDA, Naoko)

長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・助教

研究者番号：50746617

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、思春期慢性疾患患者の復学支援に活用するアセスメントツールの開発に向けて思春期の慢性疾患患者の復学時の現状および課題を明らかにすることを目的とした。文献検討と小児がん患者へのインタビュー調査を実施し、その結果、患者は復学後に学校生活における情報開示へのジレンマを感じていることが分かった。小児がん経験者の復学後の病気に関連した開示は、聞かれたら答える、親友にだけ話したと答えた者が多かった。小児がん経験者は自分で開示するか否かを決定し、その結果で困った経験を話す患者は少なかった。しかし、患者のなかには自分の状況を友人に伝えたいが伝えることが出来ない者もいた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

思春期にある慢性疾患患者は、退院後の学校生活で様々な課題に直面している。思春期の患者は、思春期特有の発達課題を抱えており、その上に疾患の管理を行うことが要求され、学校生活や社会への不適合となることがある。そのため医療者は、退院時や退院後の外来受診時に患者の状態を把握し適切な支援を提供する必要がある。今回の研究で慢性疾患の患者の復学前後の課題と情報開示の現状が明らかになり、今後の思春期慢性疾患患者への復学支援のアセスメントツール作成の基礎資料とすることができる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the present conditions and problems of adolescent patients with chronic illness at the time of returning to school, in order to develop an assessment tool to be used for the support of patients with chronic adolescent illness. We conducted a literature review and an interview survey with childhood cancer patients. As a result, after returning to school, they felt a dilemma about information disclosure in school life. Many who had childhood cancer responded that disclosure related to the disease was answered when asked, and that they only talked to their best friends. Those who experienced childhood cancer chose whether or not to disclose it themselves, and few patients talked about the troubled results. However, one patient wanted to tell his friends about his situation but could not.

研究分野：小児看護学

キーワード：思春期 慢性疾患 復学支援 小児がん 情報開示

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

難治性疾患の小児の救命率が上昇し、疾患を抱えたまま成人となる患者が増加している。そのため入退院を繰り返しながら小児期から青年期へと成長していく患者も多く、学齢期の小児は復学時に体力の低下や学習の遅れ、友人関係などの問題に直面する可能性がある。年齢に応じて患者は様々な課題に直面し、特定の発達ニーズを有する。なかでも思春期は心身ともに不安定な時期であり、この時期の患者の復学に際して社会的適応の理解と支援は、患者と家族の QOL を高めるためには重要である。アメリカでは、復学プログラムとして学校職員のワークショップ、ピア教育プログラム、または包括的なプログラムなどが実施されているが(Canter et.al、2012)、本邦では医療施設によって復学支援の内容や質には差がある(上別府ら、2012)。そのような状況を補うため、患者の復学支援に活用できるアセスメントツールを作成することで、様々な条件下でも復学支援への取り組みに活用できると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、思春期慢性疾患患者の復学支援に活用するアセスメントツールの開発に向けて思春期の慢性疾患患者の復学時の現状および課題を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 慢性疾患をもつ思春期の患者の復学の課題

慢性疾患をもつ思春期の患者の復学の課題を明らかにすることを目的に国内の質的文献のメタスタディを実施した。Paterson の meta-study¹¹⁾ の手法を参考にメタデータ分析を行った。データ分析アプローチは質的記述的方法を用いた。

(2) 小児がん経験者への入院中から復学後までの原籍校との関わり及び学校での情報開示についての経験の調査

メタスタディの結果より、復学が順調に進むためには学校で適切に情報開示を行う能力の重要性が示唆された。また、入院中の原籍校との繋がりを維持する重要性が先行研究により明らかになっていることから、患者の入院中の原籍校との繋がりの内容や方法、学校での情報開示についての現状を把握する調査を実施した。

研究対象

対象疾患は慢性疾患のなかでも長期の入院治療が必要である小児がんとした。さらに、退院時の年齢が小学生から高校生であり、研究参加時の年齢が小学校5年生から25歳までであること、普通校へ復学したこと、診断を告知されていることとした。

調査方法

半構造的面接を実施した。

倫理面への配慮として、対象者が未成年の場合、保護者に先に説明して同意を得たのち、対象者の年齢に応じた説明文書と口頭で説明を行い、保護者と対象者から書名による同意を得た。主治医からの紹介により調査依頼を行い、不調時には主治医が対応できる体制のもとで実施した。面接中は、対象者の体調に配慮し、観察を十分に行った。研究参加者の希望により、インタビュー時の保護者の同席の有無を決定した。

(3) 小児がん患者における復学支援の介入評価に関する文献レビュー

小児がん患者の復学支援の介入と評価方法の概要を、国内外の文献検討によって明らかにし

た。

4．研究成果

(1) 慢性疾患をもつ思春期の患者の復学の課題

患者の経験は 10 カテゴリ -、親の経験は 13 カテゴリが抽出された。疾患発症から復学に至るプロセスの段階によって、発症から今の状況を受け入れるまで、入院生活への順応から退院、復学後、の 3 つの時期に分類できた。疾患発症当初の患者の葛藤は、患者の症状や治療が一旦落ちつき、病気の経過の予測や対処方法が分かる頃になると状況を受け入れることが可能となっていた。入院生活への適応後は、患者は病気になった自分と友達との関係に不安を抱えていたが、前籍校の友達や教員との交流の継続により闘病生活が支えられたと認識していた。また、思春期は進学や職業選択など将来の生活に向けて動き始める時期であり、患者は将来への不安を抱いていた。復学後患者は学校生活における情報開示へのジレンマを感じていた。患者は学校生活において情報開示は必要なことであると認識しているが、開示しても友人の理解が得られず過度な心配や阻害される不安を抱いていた。

患者と親の状況をアセスメントして患者と家族がいる段階を見極め、そのプロセスに応じた適切な支援を提供することが必要である。また入院時から復学までの期間を通して、思春期の患者の発達課題および闘病体験の意味を理解し、患者が自身の力で乗り越えていけるような側面からの支援が望まれる。復学が順調に進むためには、情報開示をすることの重要性が示唆された。

(2) 小児がん経験者への入院中から復学後までの原籍校との関わり及び学校での情報開示についての経験の調査

15 名に面接を実施した。患者の年齢は 11～22 歳、復学時の年齢は 6 歳～16 歳、男性 10 名、女性 5 名であった。面接時に保護者が同席したケースは 9 件であり、保護者患者の話を補う役割を果たしていた。入院中および、復学時の情報については、研究参加者全員の保護者が学校側に対して病名や学校での注意事項などについて開示し連絡をとりあっていた。入院中多くのケースでは、学校側からの面会や電話での連絡などが行われていた。入院時に中学生または高校生の各 1 名は自分の携帯電話を用いて SNS を使い友人とやり取りしていた。

復学前には、保護者と学校側との話し合いが行われていた。ほとんどが学校で、保護者と学校間で話し合いが実施されていたが、病院で主治医を交えて行われるケースもあった。今回の調査では、復学後の学校での小児への配慮は十分になされていたケースがほとんどであった。しかしながら、復学後障害のために、いじめやからかいの経験を語った患者があった。

復学時のクラスメートへの説明は、内容をどこまでクラスメートに伝達するかは学校側から確認されていたが、保護者や患者が内容を詳細に把握していることは少なく学校に任せてあるケースが多かった。

復学後、病気に関連した患児による情報開示は、聞かれたら答える、親友にだけ話したと答えた者が多く、まったく話していない者は少なかった。身体的な障害が残った者は、積極的にクラスメートや周囲の友人に話し支援を得ていたが、1 名は積極的には話さず支援が必要な時には依頼することを話していた。

障害は残っていないが、情報開示を積極的に行っている患者はその理由として、「親友に話すことで胸の中がすっきりした、病気のことを知ってもらい他の病気の人たちを助けてもらいたい」と語っていた。また、「今後、自分と同じ様な疾患の友達がいたら話す」と答えた者もいた。情報開示をしたくないとした理由は、普通でいたい、同情されたくない、闘病体験を思い出した

くないという理由であった。

開示に関して困っていることとして、患児の体力が回復するにつれて、自分でできることが増えており友人の手助けが不要なことがあるが、そのことを上手く伝えることができずに悩んでいる患者がいた。

小児がんの経験者の情報の開示に関しては、それぞれ自分で開示するか否かを選択しており、その結果で困ったことを話す患者は少なかった。しかし中には、自分の状況を伝えたいが伝えることが出来ない者やいじめを受ける者もいた。したがって、退院前に情報開示の方法および友達との質問やからかいへの対処への支援を行い、外来通院時に学校での問題の有無について確認し、継続した支援を行う重要性が示唆された。

(3) 小児がん患者における復学支援の介入評価に関する文献レビュー

選択した文献は国外7件、国内6件の計13件だった。国外文献は、教員、級友、家族、本人への介入が実施され、復学プログラムの評価として、復学児の学校の出席や成績、仲間関係、QOL、行動評価、教員と級友の小児がんの知識および復学児への態度などが評価されていた。国内文献は、介入として復学会議や医療者と教員の連絡カードの交換などが実施されていた。評価は患者・家族や教員へのインタビューによって、支援の有効性が確認されていた。今後の課題は、復学児の能力や自尊心などによる復学プログラムの評価と、復学に関する重要変数としての友人関係の評価を検討することが必要である。日本においては、復学支援の評価の集積が少ない現状にあり、今後、復学支援プログラムの評価や評価指標について研究を進める必要がある。

引用文献

上別府圭子, 東樹京子, 武田鉄郎, 堀部敬三: 日本の医療機関といわゆる院内学級における小児がん患者の復学に向けた取り組み: 質問紙調査による現状分析. 日本小児血液・がん学会雑誌, 49, 79-85, 2010-2

Kimberly S Canter 1, Michael C Roberts: A systematic and quantitative review of interventions to facilitate school reentry for children with chronic health conditions. *Pediatr Psychol*, 37(10), 1065-75, 2012

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 本多直子、森藤香奈子、宮原春美	4. 巻 30
2. 論文標題 思春期にある慢性疾患患者の復学支援に関する課題について-質的文献の検討から-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 保健学研究	6. 最初と最後の頁 59-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高柳美里,川浪幸子, 野田翼, 森帆奈美, 山口真美, 本多直子
2. 発表標題 腎移植後の思春期患者とその家族への退院指導の取り組み
3. 学会等名 第50回 日本看護学会 慢性期看護
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野田翼, 高柳美里, 川浪幸子, 森帆奈美, 山口真美, 本多直子
2. 発表標題 腎移植後の思春期患者とその家族への退院指導
3. 学会等名 第52回日本臨床腎移植学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本多直子
2. 発表標題 慢性疾患を持つ思春期の患者に対する復学支援の質的文献の検討
3. 学会等名 日本看護研究学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 本多直子, 祖父江育子
2. 発表標題 小児がん患者における復学支援の介入評価に関する文献レビュー
3. 学会等名 第17回 日本小児がん看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮原 春美 (MIYAHARA Harumi) (00209933)	長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・客員研究員 (17301)	
研究分担者	森藤 香奈子 (MORIFUJI Kanako) (70404209)	長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・准教授 (17301)	
研究協力者	岡田 雅彦 (OKADA Masahiko)		
研究協力者	船越 康智 (FUNAKOSHI Yasutomo)		